

高等学校における居眠りをしている生徒のアクティブ・ラーニングを通じた

変容の事例的研究

○森 一平 (上越教育大学教職大学院)

西川 純 (上越教育大学教職大学院)

(j285643c@myjuen.jp)

要約

本研究の目的は、授業中居眠りしている生徒がアクティブ・ラーニングを通してどのような変化があるかを明らかにすることである。ICレコーダーやビデオカメラの映像を使う他、アンケート、インタビューで生徒の様子を分析した。その結果、アクティブ・ラーニングを行うことで、普段居眠りの多い生徒が授業中に起きている時間が長くなり、そして主体的に授業中に参加することが明らかとなった。

キーワード：アクティブ・ラーニング，高等学校，居眠り，気になる生徒

I 問題の所在

文部科学省(2014)は、高校生の47%が深夜0時以降に就寝し、学校段階が上がるにつれ、睡眠不足と感じる子どもの割合が増加傾向にあり、高校生の3人に1人は睡眠不足である¹⁾としている。松本ら(2008)は高校生において居眠りをする数は、男子よりも女子の割合が高く、²⁾野々上(2008)によると就寝時間が遅く、睡眠時間が短い生徒程学業成績が低いという報告がされている³⁾。

授業中の居眠りの理由の一つとして、和田(2002)は、授業中の居眠りについて、理解できないものや、注意、関心の向かないものは頭が受け入れまいとするメカニズムがあり、眠くなることはその拒否反応の一つである⁴⁾としている。

そのような中で、小林(2015)は、アクティブラーニング型の授業では居眠りをする生徒がいなくなった⁵⁾と述べている。また西川(2015)によるとアクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業アンケートにおいて、「眠くならない!!」や「寝てしまうと授業について行けないので寝ないようになった」という意見が見られたことが明らかとなっている。⁶⁾

西川(2010)が提唱する『学び合い』は、基本の3つの考え方があるとしている。1つ目は、「学校は、多様な人とおりあいをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より

多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場」である学校観、2つ目に「子どもたちは有能である」という子ども観、3つ目に「教師の仕事は目標の設定、評価、環境の整備で、教授(子どもから見れば学習)は子どもたちに任せるべきだ」という授業観である⁷⁾。

本研究では、授業中に居眠りの多い生徒がアクティブ・ラーニング導入後にどのような変容があり、どのように会話や授業態度が変わっていくのか明らかにする。

II 研究目的と定義について

1. 研究の目的

本研究の目的は、アクティブ・ラーニングにおける過程で教師がどのような発話や指示をしているときに生徒が居眠りをするかを明らかにし、居眠りの多い生徒の態度、起きている時間が変化するかを明らかにする。

2. 居眠りの定義について

服部ら(2010)に準拠し、本研究における居眠りを「机やいすにもたれて、うとうとするなど、眠るつもりはないのについ眠ってしまったこと」とする。⁸⁾

Ⅲ 研究方法

1 調査対象

A県立B高等学校2年生 日本史 20名
担当C教諭

2 調査時期 2016年9月～11月

3 調査方法

- ・ビデオカメラを教室の前後に2台配置し、生徒の動きの様子を記録する。
- ・生徒、教員の発話を、ICレコーダーで録音し、記録した。
- ・気になる生徒たちに着目してアンケートを分析した。

Ⅳ 分析方法

- (1) 授業を参観した後に、日本史の担当教員から直接居眠りをしている生徒を聞き、気になる生徒を抽出する。
- (2) 居眠りをしている生徒に焦点を当てて、ICレコーダーやビデオで様子を記録し、居眠りの定義⁹⁾に当てはめ、居眠りの時間とその総時間数を分析する。
- (3) 生徒は、教員がどのような指示、発話をしているときに居眠りをし、どのような時に起きているか、発話の種類のカテゴリーを亀石ら(2009)¹⁰⁾の「授業関連」に準拠した。また、アクティブ・ラーニングの最中の発話の分析は、三石(2012)のカテゴリー¹¹⁾に準拠する。
- (4) A県立B高等学校の生徒20人に、授業中の眠気に関するアンケートを取る。どのような時に生徒は眠くなりやすく、また、眠くなりにくいかを生徒の主観で考えてもらった。アンケートは松本(2008)を、8カ所置き換え、使用した。

- ・授業中の居眠りの頻度はどのくらいか
- ・就寝時間はどのくらいか
- ・平日の睡眠時間はどのくらいか
- ・授業中眠りやすい時はどのような時か。
- ・授業中に眠くなりにくい時はどのような時か

- (5) 生徒が居眠りをしている要因を明らかにするために、居眠りをしている前後の会話をプロトコルで起こした。

- (6) 教師主導の時間と生徒主体時間の変化を見て授業スタイルの変容が居眠りに関係があるのかを分析する。教師活動時間と、生徒活動時間の定義については、小林ら(2007)¹²⁾に準拠する。

Ⅴ 結果

アクティブ・ラーニングを通して居眠りの多い生徒の変容を観察したところ、授業を重ねるごとに、生徒の居眠りをしている時間が減ったことが明らかになった。尚、詳細については当日発表する。

Ⅵ 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：「睡眠を中心とした生活習慣と子どもの自立等との関係性に関する調査の結果(概要)」
- 2) 松本廣子 松嶋紀子：「高校生の生活習慣に関する調査研究」,大阪教育大学紀要第Ⅲ部門,第57巻,55-70頁,2008.
- 3) 野々上敬子,平松清志,稲森義男「中学生の生活習慣および自覚症状と学業成績に関する研究-岡山市内A中学校生徒を対象として-」,学校保健研究第50巻,5-17,2008.
- 4) 小林昭文：「アクティブラーニング入門」p32,産業能率大学出版部,2015.
- 5) 和田秀樹：「新・受験入門 <勉強法マニュアル>」pp.12-13,株式会社ブックマン社2002.
- 6) 西川純：「高校教師のためのアクティブ・ラーニング」pp.108-109 学陽書房 2010.
- 7) 西川純：『学び合い』スタートブック,pp42-43,学陽書房,2010.
- 8) 服部伸一,野々上敬子,多田賢代：「中学生の授業中の居眠りと学業成績,自覚症状及び生活時間との関連について」,学校保健研究第52巻,305-310頁,2010.
- 9) 前掲8)
- 10) 亀石由貴,山本裕子,野島栄一郎：「一斉指導における児童間の連続発話の特徴-小学校算数授業における事例研究-」,日本教育工学会論文誌,第33巻,61-64頁,2009.
- 11) 三石梨沙,三崎隆：「教師の『学び合い』経験年数とその言動に関する実践研究」臨床教科教育学会誌 第12巻,(2)83-90頁,2012.
- 12) 小林千鶴,西川純：「子供同士の『学び合い』を促す教師に関する研究」,臨床教科共通学会誌,第7巻,第1号,17-54頁,2007.